

- 耕作放棄地の解消とは、「荒れた農地の木を切り、草を刈り、整地」することなのでしょう。
- その地域に暮らす人がいて、その農地を使う人がいて、その農地で作る作物があって、そこに作る喜びが生まれなければ、解消してもすぐに荒れてしまいます。
- これは理想論であり現実的には大変困難です。しかし、少しでもこの理想に近づくことが農地と地域の再生に繋がるのではないかと考えます。
- そこで、7つのモデル的市町村の取組を、「人」、「モノ」、「仕掛け」、「地域」の4つのキーワードに分け、そこにあったストーリーを分析してみました。
- この表を耕作放棄地対策推進の参考として活用していただければ幸いです。

農地再生・活用のマトリックス

モデル的市町村	岡山県美咲町	愛媛県西条市	高知県四万十地区	島根県邑南町	岡山県真庭市	鳥取県大山町	島根県江津市
概要	集落協定組織が棚田でそばを栽培し、さらに活動を発展させた事例	発想の逆転による耕作放棄地の活用(ケール栽培)で経営を展開している事例	関係者との連携により急傾斜地で栽培する特産の栗を再生する事例	コントラクターを設立し耕畜連携を推進している事例	公共事業の激減による雇用維持のため建設業者が農業参入する事例	実証栽培により栽培技術を確立し高品質農産物を生産する事例	農地・水・環境保全向上対策により住民が地域を再生する事例
「人」を中心にして見た場合	きっかけ 役場課長がそば栽培を提案(行政) 動き始め 集落協定組織代表が地域をまとめる(リーダーシップ) 実行 集落協定組織がそば屋を開設(組織力) 変化 活動の盛り上がりにより地域に大学生を呼び込む(自信)	きっかけ 食品加工会社社長が大病を患い、健康がキーワードと気づく(経験) 動き始め 社長が耕作放棄地の長所に着目(発想) 実行 農業生産法人を設立(社長が会長に就任)(経営) 変化 県からの紹介により農商工連携事業を開始(行政)	きっかけ 大手企業幹部『栗の特長を活かし「商品」として考えるべき』(アドバイス) 動き始め 菓子業者、流通業者等が栗園再生のボランティア組織を結成(組織化) 実行 協議会組織になり、栗栽培技術講習、商品開発に向けた研究(勉強・研究) 変化 栗剪定講習会の参加農家の増加(栽培意欲)	きっかけ 役員担当者がコントラクター(作業受託組織)設立を提案(行政) 動き始め 町内一の大規模飼養者の理解(ニーズ) 実行 耕種農家と畜産農家の連携によるコントラクターの設立(組織化) 変化 戸別所得補償制度開始によるWCS稲栽培農家の大幅増加(マッチング)	きっかけ 従業員の雇用維持(悩み) 動き始め 市担当者、商工会議所から参入への働きかけ(アドバイス) 実行 雇用維持のため農業部門立ち上げ(リーダーシップ) 変化 農産物生産組合への加入による栽培技術の習得(勉強)	きっかけ 昔から夏場の白ねぎへのかん水は病害を助長との謂われ(慣行) 動き始め 関係機関が連携した営農部会設立(組織化) 実行 普及所が白ねぎへのかん水を提案(発想) 変化 水を使って儲かる農業を推進(普及)	きっかけ 農村環境悪化に対する各自治会代表者や住民らの危惧(問題意識) 動き始め 市や県等からの農地・水・環境対策の紹介(アドバイス) 実行 各自治会代表者による地元住民に対する説明・説得(合意形成) 変化 住民からの提案で地域のシンボルであった棚田を再生(提案)
「モノ」という視点で見た場合	作物等 そば まずは 棚田の景観保全 次に 赤そば栽培 そして そば屋「紅そば亭」が開店し地域の拠点に 変化 地域に活気、次は活力を秋祭りの大御輿復活	作物等 ケール、ニンニク まずは 耕作放棄地は農業、化学肥料が何年も使われていない、きれいな土地 次に 有機無農薬栽培に最適(ケール栽培) そして 耕作放棄地の借入面積が増加、ケール栽培も拡大 変化 青汁市場が飽和、ケールの新商品開発のため農商工連携に取り組む	作物等 栗 まずは 大きくて甘い四万十栗の特長に着目 次に 管理不良園再生のため下草刈を実施 そして 栗を商品として考え、どんな商品になるかシミュレーションする 変化 新商品の開発・販売による四万十栗の需要の高まり	作物等 WCS稲 まずは 不作付け田の増加、労力不足による未利用草地の増加 次に 飼料価格高騰による畜産経営の危機 そして 交付金によるWCS稲収穫機やラッピングマシン等の整備 変化 耕種農家によるWCS稲の作付け、コントラクターによる収穫作業	作物等 青大豆、水稻 まずは 市が企業を地域農業の新たな担い手として位置付け 次に 公共事業の激減 そして 社長の所有田での青大豆の実証栽培 変化 栽培の工夫による経営の安定化	作物等 白ねぎ、ブロッコリー まずは 国営大山山麓の農地開発 次に 県営かんがい施設の整備 そして 農業用水の利用促進 変化 白ねぎ等のかん水実証栽培	作物等 水稻、体験農園 まずは 耕作放棄地の増加、農業用水路等の老朽化による景観悪化 次に 自治会代表者の会議等での問題認識と解決に向けた気運の高まり そして 農地・水・環境保全向上対策による棚田とため池の再生 変化 再生した棚田を体験農園の場に活用
「仕掛け」として捉えた場合	アイデア 棚田へ赤そば観光客を楽しませよう 組織 集落協定が始まり地域で話し合う場が確立 知恵・技術 農家はそばを播くだけ、収穫作業は集落協定組織が一手に 補助(制度) 中山間地域等直接支払い制度交付金の共同取組活動でそば屋を建設	アイデア 発想の逆転「耕作放棄地は宝の山」 組織 農業生産法人を設立し本格的に農業参入 知恵・技術 百貨店での店頭販売により消費者の生の声を聞く 補助(制度) 農商工連携事業による新商品開発、施設整備	アイデア 農産物を商品として見て、その特長を見直す 組織 菓子製造業者、流通業者が取組を主導 知恵・技術 荒廃栗園を特選栗モデル園地に設定し実証栽培 補助(制度) 国産原材料サプライチェーン構築事業による事業推進体制の整備	アイデア 大規模畜産農家を説得(実需者の了解) 組織 町農業活性化支援センターによる畜産農家、耕種農家への働きかけ 知恵・技術 町農業の基幹である水稻・水田対策として行政主導により実施 補助(制度) 地域活性化・生活対策臨時交付金による機械整備	アイデア 着目春先は公共事業は少ないが、農作業は多い 組織 青大豆栽培部会への加入による栽培技術の習得・販売先の確保 知恵・技術 青大豆栽培の労力、栽培可否把握のための実証栽培 補助(制度) 農業経営基盤強化促進法による特定法人貸付事業による農業参入	アイデア 慣行栽培からの脱却(夏場、ねぎにかん水すると病害発生を助長するとの説) 組織 普及所が中心となり関係機関と取り組む実証栽培 知恵・技術 荒廃栗園の梨棚撤去、抜根による実証栽培ほ場の確保 補助(制度) 県営畑地帯総合整備事業によるかんがい施設整備	アイデア 地域の資源は地域で守る 組織 6つの自治会が結集し、住民の声を大切に地域再生 知恵・技術 古くから受け継がれる法面改修技術等を次世代に伝承 補助(制度) 農地・水・環境保全向上対策による農業施設の保全
「地域」から見た場合	地域 棚田が広がる地域 営農環境 棚田での米づくりは高齢農家には重労働 農地活用による地域の変化 そば栽培は軽作業で収入安定、耕作放棄地の発生防止に寄与 地域の変化 紅そば亭に年間13千人来客、農家に生産意欲	地域 平地ではあるが礫が多く野菜栽培には不向き 営農環境 柿の産地、廃園が増加 農地活用による地域の変化 耕作放棄地が働き場所(再生に必要な労力は地元で雇用) 地域の変化 農業に取り組む姿を認め、耕作できなくなった農地を託す	地域 急傾斜地の栗園地 営農環境 安価な輸入栗の増加、急傾斜による作業困難で廃園増加 農地活用による地域の変化 雇用機会創出(収穫量増加し地域で一次加工の労力を確保) 地域の変化 一次産業中心の地域に一・五次産業が創出される	地域 山間地域で水稻と畜産が主体 営農環境 増える田の不作付け地 農地活用による地域の変化 雇用機会創出(コントラクターの労力確保) 地域の変化 高齢の水稻農家の栽培意欲向上	地域 山間地域 青大豆が振興作物 営農環境 農地の4%が耕作放棄地 農地活用による地域の変化 営農規模の拡大により従業員の雇用安定 地域の変化 安心して農地を託せる地域の担い手が誕生	地域 大山から日本海に扇状に広がる農地 営農環境 西日本有数のブロッコリー産地であり、鳥取県有数の農業地帯 農地活用による地域の変化 荒廃した梨園地の活用に目途 地域の変化 高品質農産物生産で所得と栽培意欲の向上	地域 江の川の支流の両岸に広がる集落 営農環境 高齢化によりため池や水路の保全が困難に 農地活用による地域の変化 再生した棚田で栽培した米を高齢者向け給食サービスに活用 地域の変化 再生した棚田が小学校の総合学習に利用されるなど、環境意識が高まる
成果	農地利用 耕作放棄地再生2ha 発生防止5ha 取組 棚田、人、食材、地域の資源を活かした地域再生	農地利用 耕作放棄地再生16ha 取組 青汁市場の飽和に対応して高付加価値ケールを原料とした新商品の開発・販売	農地利用 荒廃栗園の再生150ha予定 取組 製造・流通業者との連携による売れる商品づくりと雇用の創出	農地利用 不作付け地の減少 WCS稲の増加 27ha 取組 耕種農家の所得向上 飼料の安定的確保と堆肥還元先の確保	農地利用 耕作放棄地再生0.5ha 発生防止6ha 取組 会社として年間通した仕事の確保による雇用の安定	農地利用 耕作放棄地再生 50ha 取組 大山ブランドの確立	農地利用 耕作放棄地の再生 0.3ha 取組 地域一体活動による農村景観の再生と地域の絆づくり
波及	ポイント1 集落協定組織が地域の合意形成の場となり、活動が進展 ポイント2 紅そば亭は都市住民や住民同士の交流の場 みんなが集まる場の創設 ポイント3 地域で「育て、加工し、売る」ことを完結した6次産業化農業	ポイント1 耕作放棄地はビジネスチャンス ポイント2 高付加価値の農産物を栽培し、さらに加工で価値を高める ポイント3 対面販売によるニーズの的確な把握で、さらに売れる商品の開発へ	ポイント1 荒廃園地が栗産地の再生モデル園地に ポイント2 産地で一次加工することで、実需者のニーズへ対応 ポイント3 実需者には生産現場を知ってもらい、生産者は実需者のニーズを知る	ポイント1 行政主導による畜産経営の危機を突破 ポイント2 耕種農家と畜産農家がwin winになるサービス ポイント3 事前の調査・分析による方向性の明示と合意形成	ポイント1 地域から信頼されなければ企業経営も営農もできない ポイント2 市は企業も担い手として捉え、担い手育成のために汗を掻く ポイント3 農業にも企業経営の感覚が必要	ポイント1 新たな栽培技術の確立で安定した農業経営 ポイント2 営農環境に適した作物栽培 ポイント3 生産者と関係機関の一体的取組の推進	ポイント1 住民の危機感を地域全体の取組に変える ポイント2 地域の交流拠点(シンボル)を地域みんなで再生 ポイント3 地域の人がある知恵や技術を持ち寄り、相互に協力する体制づくり

きっかけ、過程は様々、どの事例にも「人」、「地域の知恵と技術」、「和(輪)」が存在。
 これら地域の資源を再発見し、みんなで活かすことが地域と農地再生の第一歩！